MfG_J_Translation_of_lyrics_in_Japanese
～ 長岡に関わる人々の詩の翻訳

はじめに

1．翻訳詩
（1） 翻訳詩とは
（2） 返り点読みも翻訳では
（3） 翻訳詩の最たるもの、仏教経典
（4） 秋妃(秋の女) 堀口久萬一、大學のリレー翻訳詩と訳詞

2．巡り合った好きな翻訳詩のいくつか
（1） 山のあなた カール・ブッセ （上田敏訳 『海潮音』より）
（2） 秋の歌（落葉） ポール・ヴェルレーヌ
（上田敏、堀口大學、金子光晴、窪田般彌）
（3） 勧酒 武陵 （井伏鱒二訳）

3．佐藤春夫と堀口大學、友情の歌碑
（1） 佐藤春夫の訳詞集「車塵集」
（2） 奈良県桜井市の等彌神社の句碑 等彌（とみ）

4．堀口久萬一、武石貞松の「友情の双像」

はじめに

　堀口久萬一、大學父子の詩や文、書が、長岡に多く残されています。
旧中之島の長岡市長呂にある「友情の双像」の大學の碑文、
長岡駅から数分の長岡高校記念資料館の久萬一の書、そして大學の作詞による第二校歌の久萬一の手になる歌詞の書、
稽古町の長興寺にある、堀口家墓所に立つ大學の詩、等々。
堀口大學は翻訳詩の難しさを、以下の「※参考」ように言っています。 でも、そうかもしれませんが、翻訳詩の世界はすばらしいと思います。
　そんな気持ちから、長岡に縁のある人を中心に、翻訳詩に関するガイド・ネタを作成してみました。

1．では、翻訳詩のひとつとして、漢訳仏典について、お話します。
また、ほほえましい翻訳詩の作例として、長岡ゆかりの堀口久萬一、大學のリレー翻訳詩と大學自身のフランス語オリジナルの詩からの訳詞を示します。
2．では、長岡と関係する方たちではありませんが、今まで巡り合った翻訳詩お話します。の中から、心に残った幾つかについて、
3．、4．では、佐藤春夫と堀口大學の友情の歌碑、堀口久萬一、武石貞松の「友情の双像」という、長岡にゆかりの人たちによる、友情に関するお話をします。

「※参考」
　父のふるさとの長岡で幼少期を過ごした詩人の堀口大學は、
「堀口大學訳詞集（思潮社1980)」のなかで、次のように語っています。
　「所謂詩人的な態度、主観的な鑑賞等は自分の力の及ぶ限りさけることにした。
・・・字義上の解説を多くした。鑑賞は個々の読者の領分である。」
　「れれわれ日本人が、普通の文学的教養を持った仏蘭西人にも解りかねるやうな作品に対する時の困難は思ひやられる。
実に十倍、二十倍だ。第一言葉に対する理解力が違ふ。
生活が違ふ。伝統が違ふ。歴史が違ふ。固有名詞の表情に対する感受性が違ふ。・・・等等々々。」

1．翻訳詩

(1) 翻訳詩とは　上田敏

日本近代詩の発展段階で、多くの詩人が、その天才的な語学力、学識と鑑賞力を駆使し、海外の詩を翻訳し、また様々な影響を受けました。
上田敏、土井晩翠、夏目漱石、森鴎外ほか、多くの宝物を、後の私達に残してくれました。 翻訳詩というにとどまらず、独立した文芸作品として、大きく輝いていると思います。 個人的に、知った翻訳詩のいくつかを、 2．にあげました。

(2) 返り点読みも翻訳では

漢字のガイド・ネタを、日本語で、「日本の文字文化・漢字文化ストーリー」、英文で、摂田屋・漢字ストーリー (MfG_E_Settaya_kanji_story) にまとめました。

(3) 翻訳詩の最たるもの、仏教経典

私たちが日ごろ目にするお経は漢文で、ときどきお勤めするとき、そのまま漢文のまま、読誦します。 でも、この漢文の多くは、古代インド、または中央アジアの言語で書かれた仏典の漢訳すなわち翻訳です。
漢文の経典の多くは、四音、五音、七音などの漢詩のようですので、きっとオリジナルの仏典になかには詩の形態をとったものもあったと思います。
そこで、仏教経典は、翻訳詩の最たるものではなかったか、と思い至りました。
実際に、翻訳者く、翻訳層の名前の残っているお経もあります。 例えば、浄土三部経として使われている仏典の漢訳僧は、それぞれ、
仏説無量寿経は、　曹魏天竺三蔵康僧鎧の訳　三世紀中頃
仏説観無量寿経 劉宋の畺良耶舎の訳　宋(420 – 479)　五世紀中頃
仏説阿弥陀経、 姚秦三蔵法師鳩摩羅什の訳　後秦(384 – 417)

歴史上、著名な翻訳僧として、日本人になじみの深い玄奘三蔵のほか、鳩摩羅什、真諦、不空金剛がおり、四大訳経家と呼ばれることもあります。

1) 鳩摩羅什(344 – 413)、亀茲国(きじ)(新疆ウイグル自治区クチャ県)出身の西域僧で、訳出した経典の主なものとして、
『仏説阿弥陀経』1巻　『妙法蓮華経』8巻　『大智度論』10巻
『坐禅三昧経』3巻　『維摩経』3巻　『中論』4巻
『摩訶般若波羅蜜経』27巻(30巻) (※参考1)

恐らく、日本人が日常読誦するお経を最も多く残している翻訳僧だと思います。
仏教の教えのみならず、当時の数多くあるアジア圏の言語の大半に通じた、たいへんな天才だったようです。

2) 玄奘三蔵（602 – 664） 唐代の中国の訳経僧。
経典群の中核とされる『大般若経』16部600巻（漢字にして約480万字）を含め76部1347巻（漢字にして約1100万字）。『法華経』、『華厳経』
玄奘は西域の商人らに混じって、天山南路の途中から峠を越えて天山北路へと渡るルートを辿って中央アジアの旅を続け、ヒンドゥークシュ山脈を越えてインドに至ります。 そして学問を修めた後、西域南道を経て帰国の途につき、出国から16年を経た貞観19年1月（645年）に、657部の経典を長安に持ち帰えります。その後、皇帝の庇護の下、翻訳に邁進することになったのです。

玄奘の登場によって、漢訳仏典のスタイルは大きく変わったと云われています。玄奘はサンスクリット語の経典を中国語に翻訳する際、中国語に相応しい訳語を新たに選び直しており、それ以前の鳩摩羅什らの漢訳を「旧訳」と呼ぶのに対して、玄奘以後の漢訳を「新訳」と呼んで区別しているほどです。
玄奘の「新訳」は、インドで学んだ玄奘にふさわしく、原典に忠実であることを最大の特徴としているとのことです。

3) 真諦（しんだい、499- 569）は、西インドに生まれ、中国に渡来した訳経僧、真諦三蔵。
『十七地論』
『阿毘達磨倶舎釋論』（『倶舎釈論』）

4) 不空金剛（705 – 774）は、唐の高僧、訳経僧。
南インドの出身で、勅命により『金剛頂経』ならびに『大日経』等の密経経典を請来するために、南インドの龍智阿闍梨のもとに派遣され、それらの両部にわたる伝法灌頂すなわち五部灌頂を伝授されたという。
善無畏三蔵、一行禅師、恵果阿闍梨と続き、そして空海によって日本に真言密教が伝えられ.ることになります。

三蔵とは、仏教における経蔵・律蔵・論蔵の3つのことであり、仏教の典籍を総称したもので、「三蔵に精通した人」という意味で用いられることもある。
律蔵 – 僧伽（僧団）規則・道徳・生活様相などをまとめたもの。
経蔵 – 釈迦の説いたとされる教えをまとめたもの。
論蔵 – 上記の注釈、解釈などを集めたもの。

（※参考1）
『摩訶般若波羅蜜経』（まかはんにゃはらみつきょう）
般若経典の一つである『二万五千頌般若経』（じゅはんにゃきょう）の、鳩摩羅什による漢訳である。90品の比較的規模の大きな経であり、通常『大品般若経』（大品）と呼ばれている。

鳩摩羅什の訳した経の中には、『摩訶般若波羅蜜経』と名づけられる

ものがもう一つあるが、そちらは『八千頌般若経』の漢訳（408年）で、
大品に対し29品（10巻）しかないので『小品般若経』（小品）と呼ばれる。

ナーガールジュナ（龍樹）が著した『大智度論』は、本経（『大品般若経』）に
対する注釈書である。

般若経典は初期大乗から中期大乗にわたって、小さいものは『金剛般若経』
『八千頌般若経』から、大きいものは『十万頌般若経』まで多数つくられたが、
その中庸の時期（2～3世紀頃）に繁簡宜しきを得てまとめられたのが
『二万五千頌般若経』である。大蔵経に収録されている漢訳は、
竺法護訳『光讃経』（286年）
無叉羅訳『放光般若波羅蜜経』（291年）
鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』（403年、本稿の対象）
玄奘訳『大般若波羅蜜多経・第二会』（660～663年）
の4本である。
鳩摩羅什は、もう一方の大乗仏教を代表する経典である法華経とともに、
この『摩訶般若波羅蜜経』ならびにこの経の解説である『大智度論』を
最重要視し、中国での仏教布教に力を注いだ。

(4) 秋妃(秋の女) 堀口久萬一、大學のリレー翻訳詩と訳詞

2017)年の12月、県立近代美術館で堀口大學展が開催され、それと同時に市立中央図書館2階の美術センタで「詩人 堀口大學と長岡展」が開催されました。
ご覧になった方も多いと思います。さすが全国屈指の、膨大なコレクションでした。
その美術センタの展示のなかに、フランスの詩人の作「秋妃」を、堀口久萬一がフランス語の原詩から漢訳し、大學が父の漢訳を引き継ぎ日本語に翻訳詩をつくるという展示がありました。
元の詩を味わうことは残念ながらできませんが、二人のリレーのような訳詩の言葉が凄いと感じました。その後、ある方のブログに、この訳詩の詳細が載っていたので、転記します。

秋妃　　ムッシュKの日々の便り(monsieurk.exblog.jp)
九萬一 息子から贈られた詩集から2篇を選んで漢訳、大學が和訳　～ 「長城詩抄」より

メキシコ時代、大學は父の手引きでフランス近代詩を読んでみ、たちまちその魅力のとりこになりました。九萬一はフランス高踏派の詩人たち、シュリ・プリュドム、ルコント・ド・リール、アルフレッド・ミュッセなどの詩篇を愛好しており、それらを息子に読ませて、難解な箇所の解釈や説明をしてやったのですが、外国にあった大學は、これらの詩篇を1篇ずつ日本語に訳していきました。
そんな彼が父より早く、象徴派の理論的支柱と目されていたレミ・ド・グールモンの新刊詩集を手に入れて、幾篇かを日本語に移したものを添えて送ったのです。息子の得意にもまして、父の満足は大きかったにちがいありません。
大學が入手した詩集「Divertissements（気晴らし）」は、1914年に「メルキュール・ド・フランス」から出された版で、初版は1912年に出版社「クラ」から刊行され、当時のフランスで多くの愛読者を得た詩集でした。九萬一は息子から贈られた詩集から2篇を選んで、得意の漢詩に翻訳しました。その一篇は〈La Dame de l’ Autonne〉と題した詩です。
この漢文訳は、昭和5年(1930)に、第一書房から刊行された九萬一の『随筆集　游心録』に収録されています。

秋妃　久萬一の漢訳	大學　漢訳から和訳	秋の女、大學　仏語から和訳
秋妃涉西園	秋の夫人	思い出多き小径に沿いて
纖腰依短垣	思い出の小道を涉り	秋の女落葉を踏みてあり、
珊珊踏墜葉	落葉を踏む	
恍疑胡蝶魂	あの日　ここは花ざかり	思ふ、かの事は実にこの辺にて
惜春感深花空散	またあの日　緑の陰が深かった	ありしよな・・・さるを今
緑陰情話烟籠岸	今　それなのに	風は木の葉とわが希とを
秋風起兮木葉飛	風に木の葉が散るばかり	吹き散らす。
與吾情思一般亂	おお　秋風よ	
噫秋風	吹きやまぬ秋風よ	
颯颯吹不窮	お願いだ　吹き散らしてはくれまいか	
安得掃却深愁千萬斛	枯葉と一緒に　重いこの胸のほむらも	
直與墜葉飛成空		

秋妃緩緩歩　　秋の夫人
手浥菊花露　　菊を摘む
花容易一何衰　　うらぶれた残菊一枝
園荒斜陽暮　　荒れ果てた園の夕に
此苑昔曾賞薔薇　　あの日　ここで　ふたりで薔薇を楽しんだ
薔薇花心赤於緋　　花心の真赤な薔薇でした
我今来兮花凋落　　今日来て見れば薔薇はなく
苔蘚満地覆痕稀　　地は一面の苔じとね
噫斜日　　おお　夕陽よ　いつになったら
菊遶環堵室　　菊にまがきを
嗚呼何日春光度薔薇　薔薇に春光を
使吾情思甘於蜜　　妾〔わらわ〕の心に蜜の甘さを返しておくれか

秋妃立黄昏　　秋の夫人
低回暗銷魂　　黄昏の思いに沈む
金風吹衣袂　　秋風衣袂に入り
暮禽啼不喧　　ここに遊んだあの時の楽しさは
此地清遊今尚記　　今も思い出にさやかだが
仰數流星舞態媚　　過ぎてははかない夢の中
一夢追懐跡如烟　　一々語るも鳥滸〔おこ〕の沙汰
殷勤怯語意中事
噫碧空　　おお　青空よ　きかせておくれ
誰栖水晶宮　　かの水晶宮に栖むのは誰か
何時伴得牽牛訪織女　牽中が織女を訪ねるのはいつか
零露溥溥満天風　　こぼれる露が冷たくて空吹く風が荒れ狂う

秋妃立荒園　　秋の夫人　廃園に佇〔た〕つ
落葉埋履痕　　落葉が足跡を埋めつくす
満目荒涼處　　忽ちすさぶ秋風が肌身にささる
黄草招幽魂　　ひと思い　あの世の道を辿ろうか
疇昔新盟膠漆固　　おお　秋風よ
情緒宛如合歓樹　　吹きやまぬ秋風よ
秋風起兮粟我肌　　お願いだ　吹き散らしては呉れまいか
魂欲飛越清郊路　　枯葉もろとも　重いこの胸のほむらも
噫秋風　　目に余るここな荒れよう
颯颯吹不窮　　枯れすすき　幽霊が出て来そう
寄語掃却深愁千萬斛　なれそめのあの頃は幸せだった
直與墜葉飛成空　　合歓樹の胸一ぱいのうれしさだった

和訓は大學で、この漢詩を『長城詩抄』(この九萬一の漢詩集は息子大學の手で、1975年、

昭和50年に、私家版として100部が株式会社大門出版から刊行されました）に収めるにあたってつけられたものです。ちなみに原詩は次の通りです。

La dame de l'automne écrase les feuilles mortes
Dans l'allée des souvenirs:
C'était ici ou là... le vent passe et emporte
Les feuilles et nos désires.

O vent, emporte aussi mon cœur: il est si lourd!

La dame de l'automne cueille des chrysanthèmes
Dans le jardin sans soleil.
C'est là que fleurissent les roses pâlies que j'aime,
Les roses pâles au cœur vermeil.

O soleil , feras-tu fleurir encore mes roses?

La dame de l'automne tremble comme un oiseau
Dans l'air incertain du soir:
C' était ici et là, et le ciel était beau
Et nos yeux remplis d'espoir.

O ciel, as-tu encore des étoiles et des songes?

La dame de l'automne a laissé son jardin
Tout dépeuplé par l'automne
C' était là… Nos cœurs eurent des moments divins...
Le vent passé et je frissonne...

O vent qui passé, emporte mon cœur il est lourd!

グールモンの詩句については、大學がフランス語の原文から直接翻訳したものが『グウルモン詩集』（新潮文庫、昭和26年）に載っています。これと比べてみても、九萬一の漢訳はグールモンの詩想をじつに上手く汲んで翻訳されています。
九萬一は息子大學から贈られたレミ・ド・グールモンの詩集がよほど気に入ったのでしょう。
グールモンの原詩、九萬一の漢訳、そして大學によるその和訳、さらにはフランス語からの直接訳の四つを並べて鑑賞すると、それぞれの言語のもつ感性の違いが分かって大変興味深いものです。（続）

以上、長いですが、「ムッシュKの日々の便り」から引用。

山のあなた　カール・ブッセ
上田敏訳『海潮音』より

山のあなたの空遠く
「幸さいはひ」住むと人のいふ。
噫ああ、われひとと尋とめゆきて、
涙さしぐみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸さいはひ」住むと人のいふ。

Karl Busse (1872-1918)
Über den Bergen

Über den Bergen, weit zu wandern,
sagen die Leute, wohnt das Glück.
Ach, und ich ging im Schwärme der andern,
kam mit verweinten Augen zurück,
über den Bergen, weit, weit drüben,
sagen die Leute, wohnt das Glück.

秋の歌（落葉）　ポール・ヴェルレーヌ（1844 – 1896）
1867年に出版されたヴェルレーヌ初の詩集で発表された。

http://marieantoinette.himegimi.jp/book-automne.htm

（上田敏訳）『海潮音』	（堀口大學訳）	Chanson d'automne
(1874-1916)	(1892-1981)	Paul Verlaine
秋の日の	秋風の	Les sanglots longs
ヰ゛オロンの	ヴィオロンの	Des violons
ためいきの	節ながき啜泣（すすりなき）	De l'automne
ひたぶるに	もの憂き哀しみに	Blessent mon coeur
身にしみて	わが魂を	D'une langueur
うら悲し。	痛ましむ。	Monotone.
鐘のおとに	時の鐘	Tout suffocant
胸ふたぎ	鳴りも出づれば	Et blême, quand
色かへて	せつなくも胸せまり	Sonne l'heure,
涙ぐむ	思ひぞ出づる	Je me souviens
過ぎし日の	来（こ）し方に	Des jours anciens
おもひでや。	涙は湧く。	Et je pleure
げにわれは	落葉ならね	Et je m'en vais
うらぶれて	身をば遣（や）る	Au vent mauvais
ここかしこ	われも、	Qui m'emporte
さだめなく	かなたこなた	Deçà, delà,
とび散らふ	吹きまくれ	Pareil à la
落葉かな。	逆風（さかかぜ）よ。	Feuille morte.

（金子光晴訳）
(1895-1975)

秋のヴィオロンが
いつまでも
　すすりあげてる
身のおきどころのない
さびしい僕には、
　ひしひしこたえるよ。

鐘が鳴っている
息も止まる程はっとして、
顔蒼ざめて、
　僕は、おもいだす
むかしの日のこと。
すると止途（とめど）もない涙だ。

つらい風が
僕をさらって、
　落葉を追っかけるように、
あっちへ、
こっちへ、
　翻弄するがままなのだ。

（窪田般彌訳）
(1926 - 2003　はんや)

秋風の
ヴァイオリンの
　　ながいすすり泣き
単調な
もの悲しさで、
　　わたしの心を傷つける。

時の鐘鳴りひびけば
息つまり
　　青ざめながら
すぎた日々を
思い出す
　　そして、眼には涙。

いじわるな
風に吹かれて
　　わたしは飛び舞う
あちらこちらに
枯れはてた
　　落葉のように。

英訳も、いろいろと発表されている。

Paul Marie Verlaine, 1844- 1896

Original French	English Translation	
Chanson d'automne	Chanson d'Automne	
	Versions: #1	Versions: #2
Les sanglots longs	Leaf-strewing gales	The long sobs
des violons	Utter low wails	Of violins
de l'automne	Like violins,-	Of autumn
blessent mon cœur	Till on my soul	Wound my heart
d'une langueur	Their creeping dole	With a monotone
monotone.	Stealthily wins....	Languor.
Tout suffocant	Days long gone by!	All breathless
et blême, quand	In such hour, I,	And pale, when
sonne l'heure,	Choking and pale,	The hour sounds,
je me souviens	Call you to mind,-	I remember
des jours anciens	Then like the wind	Former days
et je pleure.	Weep I and wail.	And I cry;
Et je m'en vais	And, as by wind	And I go
au vent mauvais	Harsh and unkind,	In an ill wind
qui m'emporte	Driven by grief,	Which carries me
deçà, delà,	Go I, here, there,	Here, there,
pareil à la	Recking not where,	Like a
feuille morte.	Like the dead leaf.	Dead leaf.

https://lyricstranslate.com

勧酒　于武陵

勧 酒　（于武陵）　（書き下し文）　酒をすすむ

勧君金屈巵	君に勧む　金屈巵(きんくつし)
満酌不須辞	満酌(まんしゃく)　辞するを須(もち)いず
花発多風雨	花発(ひら)けば　風雨多し
人生足別離	人生　別離足る

（井伏鱒二の訳）
君に　この金色の大きな杯を勧める
なみなみと注いだこの酒　遠慮はしないでくれ
花が咲くと 雨が降ったり風が吹いたりするものだ
人生に 別離はつきものだよ

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

佐藤春夫と堀口大學、友情の歌碑

佐藤春夫は、作った詩も多くありますが、すばらしい訳詞集「車塵集」も残しました。 大學は、与謝野鉄幹の知遇を得、『三田文学』を介し、同門の佐藤春夫とは終生の友人でありました。 長岡に関係のある詩人のひとりであります。
友情の歌碑とも言われている、奈良県桜井市の等彌（とみ）神社の、
佐藤春夫の歌碑、左には堀口大學の歌碑についても、まとめました。

佐藤春夫の訳詞「車塵集」から、ひとつ。

秋ふかくして　　魚玄機
自嘆多情是足愁　　わかきなやみに得も堪えで
況当風月満庭秋　　わがなかなかに頼むかな
洞房偏与更声近　　今はた秋もふけまさる
夜夜燈前欲白頭　　夜ごとの閨に白みゆく髪

佐藤 春夫（1892年（明治25年）4月9日 – 1964年（昭和39年）5月6日）
近代日本の詩人・作家。 文化勲章（1960年）
(同年の堀口大學の文化勲章は1979年)
1921年（大正10年）に『殉情詩集』を発表し、小説家、詩人として広く認められる。
谷崎潤一郎が妻千代に冷淡なのを見て同情から恋に変わり、谷崎はいったん佐藤に妻を譲ると言うが、谷崎は妻の妹せい子（『痴人の愛』のナオミのモデルとなった女優・葉山三千子）と結婚するつもりでいたがせい子に断られ、妻が惜しくなって前言を翻したため、谷崎と交友を断つ。
谷崎は当時小田原に住んでいたためこれを小田原事件という。失恋に苦しみ、代表作である「秋刀魚の歌」（詩集『我が一九二二年』所収）などで千代への思慕を歌った。
1930年（昭和5年）谷崎潤一郎の妻・千代を譲り受けた。

奈良県桜井市の等彌(とみ)神社の句碑

右から佐藤春夫の歌碑、左には堀口大學の歌碑。
友情の歌碑とも言われ、真ん中にその証として大學の書いた詩(手紙)。

「草もみぢ　友の聲かと　虫をきく」

「さきに來て等彌の　おん神おがみし
友につづきて　われもおろがむ」

「大和には　みささき多し　草もミぢ」

佐藤春夫の句の建碑は没後昭和47年11月。
「大和にはみささき多し艸もみち」（佐藤春夫）（昭和47年11月４日除幕）
除幕式に友人の堀口大學が参列。

帰京後、詠まれた歌と文書を神社では横に並べて建碑された。
「さきに来て等弥のおん神をろがみし友につゞきてわれもをろがむ」
（堀口大學）（平成6年11月24日除幕）

真ん中の石碑には･･･「等弥神社々頭のかの春夫兄の句碑の脇に、老生の歌碑を
お建て下さるとのこと、これは願ってもない幸せ、よろこんでお受けいたします。
お互いが二十才にもまだならぬ頃から、長い一生のあいだ老生をいたわり、
導き続けてくれたこの友の、世にたぐいない友情と、これに慕いよる老生の
心の後の世の姿として何ものがこれにまさりましょうぞ。」
（昭和48年7月21日　大學老詩生）

同じ社務所前にあるのが、
「草もみぢ友の声かと虫をきく」（堀口大學）（昭和49年5月５日除幕）

堀口久萬一、武石貞松の「友情の双像」

160930 春日 ©KASUGA

堀口久萬一、武石貞松の終生変わらぬ友情を讃える双像、
双像の作者は武石弘三郎、石碑の撰文は堀口大學

中越
広域ガイド

芸術、文学
ガイド

堀口大學
詩人としての仕事

松岡譲との交友
佐藤春夫との交友

堀口大學、松岡譲は
長岡市内の多くの
学校校歌を作詞

武石弘三郎
彫塑家としての仕事

県内に多くの銅像
（復元像を含む）

久須美秀三郎
久須美東馬
池原康造
星野嘉保子
・・・

身近な人々の
肖像も残した

老母像
真野夫婦像

長岡の中之島・長呂に
建つ「友情の双像」と
「双像余情石碑」

堀口久萬一
外交官としての仕事

日露戦争・巡洋艦購入

日本海海戦投入と
山本五十六との関わり

武石貞松
郷土への貢献
（殖産・農業経済の振興）

灌漑・治水
への貢献

「東北日報」の漢詩、
俳句撰者として
会津八一との交友

高橋竹之介
誠意塾と長谷川泰

燕・粟生津の漢学塾
「長善館」と塾出身者

中越各地
の良寛像

「長善館」創立者・鈴木文臺の
幼少期の学才を見出した良寛

戊辰の役と
高橋竹之介

大河津分水と
高橋竹之介

江戸時代、長岡藩領内の信濃川の
大氾濫は実に約40回にも及び、
長岡城まで浸水すること7回
～苛烈な洪水と地震災害

「寛政甲子夏」をはじめ、
良寛の、弱者に寄り添う心

新潟の形成史
災害史
治水史
豪農成立史